



卷頭言

温故知新

稻場文男*

人里遠くはなれた高山や離島などで見る晴天の夜空一杯に散りばめられたような星の輝きには、改めて自然の美しさとその明るさに一驚させられることがある。人類は技術の進歩によって、火を使い、ローソクを作り、やがて電灯の発明というように、特に夜の生活に必要な手段を次々と手に入れるに従って、このような満天の星空とか満月の明るさの下での生活から離れ、文明の下で次第に視力を退化させてきているような気がする。人間は視覚を通して得る情報が 80 パーセント位もあって、我々の感覚の中でも最も大切なもののといわれているが、そのような比率は果して照明などのさまざまな技術の進展によって増強してきたものであろうか。

アフリカのある原住民族の中には視力が 7 をこえる者がかなりいるとの記事を最近新聞で見たことがある。このことは視覚を通しての情報というものが人間の活動には時代をこえて本来的に重要なものであることの一証左ではないかと思う。そのために、文明の開かれないと大昔の人間には野性的な能力ともいえる鋭い視力が備わっていて、満天の星空や満月のない夜さえ、それぞれの集団が安全に過すことができたと推測される。

このようなことは人類史、ないし文明進化論的な立場からすれば当然のことかも知れないが、非常に鋭い視覚ということにこだわるとすると、例えば、東洋では光輪や光芒を背負った仏画や仏像が非常に多く、また西洋ではキリスト教会などで天使が光の輪を頭にいただき、聖人が光に包まれている姿がよく見受けられるが、このような光は単なる崇拜や修飾のためのものであったのかとの疑問が生じてくる。言い換えれば、そのような光輪や輝きは東西共通していて、しかも時代的にもかなりの年代にわたって創作が行われていることに多大の関心が寄せられるのである。

このような疑問を非科学的、超能力マニア的にとられるか否かは読者の自由であるが、現在の光計測・処理技術を一層発展させて、その極限を追究することは、このような人類の歴史の中に埋もれている古い課題を新たに掘り起し、さらに我々を包み、育んでいる身近のさまざまな光の本質を改めて見直すことになるのではないかと思う。ちなみに、筆者らの生物フォトンプロジェクトの研究グループは最近葉緑体からの極微弱な遅延蛍光が非古典的なサブポアソン分布をとることを見出したが、我々の周囲にはまだまだ沢山の未解の光現象があることの一例であり、大いにそのような課題の発掘、探究を期待したいものである。

* 東北大学電気通信研究所 〒980 仙台市青葉区片平 2-1-1